

「堀越登志喜の考え方」

ライフ・スタイル (生き方)



第1章 春 或いは 起

0歳～25歳ぐらいの期間が人生に於ける成長の為の春の時節だと考えます。

父親からの遺伝子を貰い受け母親によってこの世に生み出された赤子は、幼児から小児の時代を経て中学校から高校へと社会や組織との交わりを深め、徐々に成人へと成長して行きますが、大学を卒業し社会に出てなお、暫くの間は学び成長する為の期間だと思います。

勿論その後も成長し続けることは大変重要であり学び続けなければなりません、この時代は育まれ学び成長する事がその根幹であると考えています。

その人の資質というものが生れ落ちた時に備わったものであるならば、赤子から幼児、13歳位までの小児へとはぐくまれ、言葉を含めた基礎的な学習の期間は、その母親の存在がその人のほとんどの部分を支配しています。

物事に対する認識や、人同士の関係作りなどの社会への入門に必要な全人格の形成がなされる訳ですから、母親が全ての後天的な素養、習慣、コミュニケーション能力などを支配するのです。

つまり母親がその全人格をかけ、愛情深くその子を育てたのであれば、その母親の知的レベルひらたく言えば学歴や、立ち居振舞いなどを含めた品性などに関係なく、その子どもは、精神的に安定した、コンプレックスを持たないおおらかな人間性を備える事になるのです。

近年の未成年者（特に低年齢の）による事件の背景には、明らかにその母親の母性の欠落が見られます。

決して教育レベルの低くない家庭の子ども達がその人格において、重大な瑕疵を内在したまま人間同士の営みを十全に成し得ず、破壊の暗闇へと走っていかざるを得ない根本的な原因は、まさに母親との絆の破綻にあると思います。

勿論この時に父親にもその役割に於いて責任を負う部分は多分にあります。

その家庭を経済的に成立させているのは多くの場合父親です。

母親が子育てに専念する環境を成り立たせるのは、父親が本来担うべき役割な筈です。

しかし近年女性の社会進出の環境が整い、女性が働く機会に恵まれた社会を背景に、担うべき義務を放棄した、或いは単にその能力に欠けた父親の代わりに、

母親が働く事により子供との大事な時期に於ける接点を少なくしてしまう傾向は、社会に重大な影を落とし始めています。

自意識を持ちしっかりとした認識の元に働く女性の社会進出と、自堕落な父親の為に働かざるを得ない母親が抱える問題や、子育てに一生懸命になることが出来ず仕事に自己実現を見出してしまう母親の抱える問題は、まったく次元の違う問題である事は自明な事でありましょう。

高校生から大学生の時期は、或いはすぐに社会人になったとしてもこの期間は自我を形成し、自らの人生の方向性を少しずつ見出す時期となります。

生きる意味を問いかけ、自分が誰かを考え始めます。

この時の環境や吸収した知識や学問、見聞や経験は、その後のその人の職業つまり生業を決定する重要な役割を果たす事になります。

成人後(20歳以降)も暫くは社会貢献をしながらも社会人として必要な素養や、仕事を進める上での基本的な礼儀作法や常識を身につける必要があります。

第2章 夏 或いは 承

25歳～50歳ぐらいの期間が人生に於ける労働の為の夏の時節だと考えます。

その人の人生に於いて、職業の選択はその人生の中に於ける決断の中でも重要な決断であると言えるでしょう。

人はどのようにして、どんな理由から自分の生業である職業を決めるのでしょうか。

成長期の期間に吸収した知識、学問や経験、見聞などと、自己の性格、特徴などから自分に適した職業を見出していきます。

しかし、その選択は、その人の生涯に大きな影響を与えます。

その選んだ職業に従事する時間を1日の3分の1はついやすることになるでしょう。

或いは1日の半分をその為の時間として過ごす人もいます。

最も自分に適した職業、つまり天職と言われるような職を持つことのできる人は、どれほどこの社会にいるのでしょうか。

周りを見回して、どれほどに人がそのような職業に就いているのでしょうか。やはり稀な事だといえるのです。

社会一般では、最終学歴終了後、就職活動を行いその結果、ある会社の決められた職種に就くのが通例といえます。

今多くの若者が、職業の選択に悩み社会に出てからも就職せず、アルバイトで生活続けるいわゆるフリーターが増えています。

また転職する若者も多く、それらの若者は自分にあつた職業を求めて試行錯誤しているのです。

ではいったい何が、正しい自分が求める職業との邂逅なのでしょう。

第一の選択は、報酬額の多寡による判断です。

今その人が就業可能な仕事の中で最も報酬額の高い会社に入社する選択です。

往々にしてその他の条件、時間に制約があったり、きついノルマに悩まされたり、ストレスの多い環境や人間関係を強いられたりする事には、目を瞑らなければなりません。

しかしこの選択は、強い金銭に対する欲望が動機なのですから、お金に対する執着が強くなければ長続きしません。

第二の選択は、自分が面白いと思い興味を持てる職業を選ぶ事です。この選択のポイントは、自分が面白いと思う仕事なのですから、のめり込んで仕事に打ち込む事ができる点です。

上司からの指示、命令によってのみ行動するのではなく、自発的な意志を持ち自らの為に働くのですから必然的に一生懸命働く事ができます。

この一生懸命働く事がその中に無償の行為を生み出し、その働いた結果の成果を得る側は、例えば雇用主や客先は大いに納得し、感謝し、その報酬に於いて報いようとするに至ります。

一生懸命働く事が良い結果を生み出し、相手（顧客や雇用主）を満足させ、その結果自分に還元される利益を生み出す事が出来れば、それは正（善）の循環を生み出し、自分も、また回りの人々をも幸せにする事が出来ます。

しかし、自己中心的な自己満足のみを追いかけたような仕事であると、相手（顧客や雇用主）の満足度は低く、利益の還元どころか、収益はマイナス（負）になりかねません。

この違いは、本来が利潤追求のための仕事でありながらも、利益を共有し、或いは利他的な（献身的な）仕事になるかどうかの違いです。

ではどうすれば、自分が面白いと思う仕事を一生懸命行い相手に喜ばれ、共に利益を共有するような仕事を見出す事ができるでしょう。

それは、はっきりとした目標を持つことから始まります。目標とは、甘い夢のようなものではなくなるべく具体的で、文章化できる事が大切です。

そのため、あまり先の未来的なものではなく、近未来ではっきりとイメージできる事が必要です。特に専門学校や大学を卒業する頃の年齢では、まだ難しい事かも知れません。

そこで必要な事は、

1:紙に書き出す事です。紙に書ける為には、その目標(ゴール)が明確である必要があるからです。

2:そして紙に書き出せる明確な目標(ゴール)であれば、数値化し測定できる目標(ゴール)にする事が可能となります。

3:数値化した目標(ゴール)は、その進捗が解かるので確認作業(チェック)が出来ます。

4:次に、数値化し測定できる目標(ゴール)への進み具合を、管理(マネジメント)する必要があります。

5:数値化した目標(ゴール)を達成した時のイメージをはっきりとした映像として頭の中に思い描き、具体化します。映像化(ヴィジュアル化)は、認識を強め心に強く印象付ける事ができるからです。

目標(ゴール)を持つことは、幸せな人生を実現する為の重要な、出発地点だと言う事が出来ます。

自分の目標(ゴール)により近づく為に最適な仕事を見つける事は、この人生の最も力のみなぎった時節に、優先順位の1番重要な課題です。

最初に就いた仕事が、自分の目標(ゴール)に近づく為のものではないと思ったときには、転職すべきです。

しかし30歳までには必ず自分の為の本来の職業を見つけておかねばなりません。

第三の選択は、創業です。

すでに存在する仕事に就くのではなく、自分自身が、自分で考えたやり方で仕事を組み立て事業化する事は、たやすい事ではありません。

すでにある仕事のやり方や、事業を真似しただけでは後から参入する人は、すでに仕事を展開しシェアを持っている人には勝てません。

後から参入するには、明らかに他の人（他社）よりすぐれた仕組みを持つか、今までに無い価値を創出する新規事業でなくてはなりません。

しかし、他の人（他社）よりすぐれた仕組みを持つと言っても、明らかにその顧客が従来の取引を停止してまで、取引先を変えるほどに、はっきりと目に見える優位性が無ければなりません。

また、新しい仕組みのビジネスを始める場合は、その事業を社会に認めさせ又持続可能な利益の確保までの資金や、実際に開始して見なければわからない（なにしろ過去に例が無いわけですから）困難を乗り越える、洞察力、実行力、忍耐力、を必要とします。

リスクを乗り越え創業と言う向こう岸へ渡りつくには、目標（ゴール）をはっきりイメージし、目標（ゴール）に向かう強い意志の力と、勇気を必要とします。

いずれの選択をしたにせよ20代は人からの指示を受け、30代は率先して、40代は人に指示をしてその課題を達成する事が一般的です。

そのため、最終的に人を動かす、つまりマネジメントに取り組む事はいずれ必要な、重要な課題の一つとなります。

指示を受けて仕事をするにも、率先して仕事をするにしても、組織の一員としての役割を担わなければなりません。

この時節には、人生の中で仕事と同時に、家庭を築く時期と重なります。

配偶者にめぐり会うまでのいろいろな出来事は、その人の感受性を豊かにし、他者に対する慈しみや、優しさを育むに違いありません。

この時代の前の「春」時代で述べた、親子関係の今度は自身が、親の役割を担わなくてはなりません。

我が子に対する無償の愛が次の世代を育てる事になります。

しかしそのことが正しく行なわれない時は、前節で述べたように、子供たちは歪んで育つ事となり、歪んだ社会を写す鏡となるでしょう。

第3章 秋 或いは 転

50歳～75歳ぐらいの期間が人生における収穫の為の秋の時節だと考えます。

この期間に必要な財産を持ち、健康で、豊かな人間関係を築き、自分を磨き上げ、自由で美しく豊かな時を過ごすべきだと考えています。この「必要な財産」を持ち、「健康」で、「豊かな人間関係」は、この時代を迎えた人にとって、その人が「幸せ」になる為の、共通した、重要なテーマであります。

この前の働く「夏」の時代にも勿論財産は必要で、豊かな生活を送るべきですが、精神の充足に於いて、仕事や家庭を含む人間関係の構築に重きがおかれていると考えられるからです。

勿論50歳を過ぎても又60歳を過ぎても尚人は働く必要がありますが、それまでに蓄積してきた、財産或いは、精神の充実、見識や教養、によって経済的にも精神的にも自由で、他者からの支配、干渉、束縛から解放された境涯を目指す事ができる時代と言えます。

この事は無論その前の時代の蓄積によって実現されるのですから、充実した「夏」の時代がなければなりません。

多くの現代社会に生きる人々は、その財産のほとんどの蓄積を居住用の不動産としています。しかし、持ち家を持つことが、人生に於ける経済的な目標（ゴール）で、良いかという疑問が残ります。

人によって経済的な価値観は、実に多様だと思いますが、クルーザーを持ち、別荘を持ち、高級な自動車に乗る事が、夢だと思う人が居る一方で、生活用品が手の届く範囲にある、四畳半に住めれば充分だと思う人もいます。

経済的な目標（ゴール）と言うのは、その人にとっての必要十分な金銭のボリュームがどれほどかによります。その達成の度合いは、前の「働く時代」の成果なので、この時代に至って急に目標（ゴール）に近づける訳ではありません。ただ、多くの人々がこの時代になってやっとその成果を手にする事が、多いのではないのでしょうか。

又この時代になると、それぞれの人々が、少しずつ或いは、重大に、自分の健康について危惧を持ち始めます。

健康である事は、人生の大きな目標（ゴール）たり得る事とは少しニュアンスが違いますが、この成果を手にし、「自由で美しく豊かな時を過ごす」時代にとって、無くてはならない条件です。

勿論どの人生のステージに於いても「健康」は、絶対必要な要件ですが、この時節を迎えると、そろそろその年齢に見合った、癌や、心臓病、脳血管疾患が忍び寄り、その犠牲となる人も出始めるからです。

「健康」により注意を払い、慎重な対応を心がける事は、この時代を迎えた人々にとって「自由で美しく豊かな時を過ごす」為にも大変重要です。

三番目のテーマである、「豊かな人間関係」を築く事もまた、この時節に於いて欠くことのできない要件です。ただしこの「豊かな人間関係」は、「必要十分な財産」のように前の時代の成果ではない事もしばしば起こりえます。それは、仕事上の人間関係や、所属する組織（会社等）に於ける人間関係は、契約によって発生した物であり、上下関係或いは同僚であっても利害関係から離れる事が出来ず、純粋な心の結びつきによる関係である事が難しいからです。

利害関係の束縛されない、サークルの仲間や、ボランティア活動の仲間など、同士の関係によって結びついた人間関係こそ豊かな交友や人との係わりを育み、人生を豊かにする上で欠くことのできない存在です。

一方家庭に於いて、子供たちが独立するか、同居していたとしても活動としては、自立する歳頃となり、親とは別行動になるため、夫婦が基本的な核となっていきます。そのとき新たな信頼関係、あるいは、それまでの子育てを含めた共同作業のパートナーとしての信頼関係がないとその絆は、崩れてしまいます。

熟年の離婚は、長い子育ての期間にそれぞれが、違う目標（ゴール）を目指していた結果かもしれません。

では、この「必要十分な財産」を持ち、「健康」で、「豊かな人間関係」があれば、この時代を迎えた人々は、自由に美しく豊かな時を過ごす事ができるでしょうか。

この時節のある年齢で退職したり、素晴らしい事業の成功を収めハッピーリタイヤする事の出来た男性も、既にかかなり以前から子育てから開放され、仕事にも取り組み、あくせく働く必要もなくなった女性も、果して何をするのでしょうか。

人が生活や利益のために働くことを仕事と言うのであれば、利害を離れた活動を人は仕事とは呼びません。

草野球に行くことも、スキーやサーフィンやゴルフやバスケットやサッカーや相撲をする事も、

町内の縁日の手伝いや、近所の氏神様の神社のお掃除や、お年よりの為のボランティアも、

ヴァイオリンや、三味線や、ギターや、ピアノを弾いたり、トランペットを吹いたり、長唄や、歌曲を歌ったりすることも、

バレエや、タンゴを踊ったり、地唄舞を舞うことも、

ルーブル美術館でモナリザを観たり、システィナ礼拝堂で最後の審判を観たり、

それら全ては、お金の為ではなく自分自身の為の行動であり、自分自身の満足の為、或いは自分を磨く為の活動です。

生活の為に働く必要がないとしたら、何をする事が日々の営みになるのでしょうか。元来働く必要などない資産家であれば、その人の歳に関係ありませんが、一般的な人々においては、おおよそ定年退職後の事でしょう。

人がお金の為に働かなくても良くなった時に、何ができるかはその人にとって大変重要な事となってきます。六十歳の誕生日の次の日から何かをはじめめる事は出来ませんが、その日から何かができるわけではありません。何かが出来ようになっている為には、その事が自在にできるには十年、多少できる為にも三年は準備が必要です。

つまり定められた日からさかのぼる事三年から十年前にその何かをスタートしていなければなりません。

多くの人々がその一生を、生きて行く生活の為にあくせく働き、子供を育て世代交代しただけの人生で終わってしまうのですが、それはそれで、日々の生活の中に喜びを見出せる事は素晴らしい事だといえます。

しかしその事は、純朴で誠実な人生を送った事にはなりますが、人が何処から来て何処へ行くのかと言う事とは、程遠い人生だったとも言えます。

では人は、いつ何処で何によって、目を覚ます事が出来るのでしょうか。日々の生活があり家族が居るのですから、出家する訳にはゆきません。(勿論、悟りを開く事が何より大事であるならば、俗世との関わりは捨てざるを得ませんが)

日々の生活の中での自己研鑽しかありません。その自分を磨き生きる事と向き合う為には、スポーツや芸術や社会との触れ合い(ボランティアなどの社会活動)などによって自分自身を発見する必要があります。

自分が生活の為の仕事から離れた時何が出来るか、それが問題です。つまりその事の準備は、この時代の人にとって重要な課題だと言う事です。この出来る事の為に準備万端整える事は、この時代に必要十分な財産を持ち、健康で、豊かな人間関係をきずき、自分を磨き上げ、自由に美しく豊かな時を過ごす為に必要欠くべからざる条件です。

心して何が出来るようになるべきかを考えねばなりません。

第4章 冬 或いは 結

そして、それまでの事が人生の冬（老人）を迎える準備となり、人生最後の試練である死を、荘厳で品格のある美しいものにしなければなりません。死こそが、その人の人生の象徴です。

しかし、死ぬまでの間の人生の過ごし方とはどの様にあるべきでしょうか。体はもはやいたわりなく扱えず、衰えた肉体と折り合いをつけながら、或いは、人によっては病魔と同居しながら、日々を過ごさねばなりません。

この時代を配偶者と共に歩めるとしたならば、その事は神に感謝するに値するでしょう。

子供たちさえ人生の収穫期に入り、孫の世代が社会に進出してゆきます。さらに健康で長生きしたのであれば、第四世代のひ孫に会えるかもしれません。

この時代を迎えた人々の関心事はやはり健康です。勿論自分がなしえる事を続けられるのであれば、社会の役に立つ事もできるでしょうし、自分を磨きつづける事も可能です。

しかし前の時代のように縦横無尽に活躍する事は難しく、表舞台からは身を引く事になります。

体の衰えや、少しづつ或いは大きく襲いかかる病魔との戦いが始まります。

この時の家族とのかかわり方は、それまでの人生でのかかわり方の投影であり、愛情に溢れたかかわりがあれば、愛情の溢れた関係が成立しているに違いありません。

その家族構成は、その人にとって、人生の最終章を過ごす日々を大きく左右する事になります。

介護が必要な時に至り、どのような日々を送れるかは、それまでのその人の人生そのものが反映されるのです。正にその人が赤子であった時に、どのように育てられたかが重要なように、誰にその最後を看取ってもらうかは、その人の人生を仕上げる上で重要な事となるでしょう。

この人生の最終章に於いて、ただの厄介者の老人であってはならないのです。

人生の最終章と、最後の重要な課題である「死」を迎えるにあたって、その人を輝かせられる唯一のことは、その人の精神の「高み」だけです。

死に向かう人生のエピローグを付け加えられるのは、それまでの人生の中で磨かれてきた「心のありよう(境涯)」なのです。

この時節の前半をかくしゃくとして元気に過ごす人々も多くいます。健康に留意し、十分に体を鍛え続けた人達です。しかし、たとえ90歳にして人の手を借りずに自立的な生活をおくっていたとしても、いずれは、死と対面する時を迎えるわけです。

どちらの時節にしても、およそ社会的な貢献からは遠のき、或いは人の手を煩わせて生活している時のその人の尊厳は、まさしく人生の中で培われた、精神の「輝き」だけなのです。

では、精神の「高み」や、精神の「輝き」とはどんな事を言うのでしょうか。

それは、その人が、その人生の中で得た知識や経験であり、勉強した事や、職業の長い積み重ねからしか習得しえないような技術や、その人が行なった全ての研鑽などによって、辿り着いた「境地」の事なのです。

心の「境地」は、世俗的な利益を得るためだけの仕事や、その為の人間関係などによっては決して、研かれず高められもしません。

自己と向き合い、修練を積み研鑽を積む事が必要です。

そのために費やした時間と努力の総和が、その人の心の「境地」だと言っても過言ではないでしょう。

そのために、宗教に帰依する人もいます。それどころか出家してしまう人もいるわけです。

全身全霊で心の「境地」を求めるのであれば、僧侶や牧師になるための道を求める事が必要です。しかし、一般の人々にとっては、スポーツや武道や芸術などに触れ合う中で自己を高めていきます。

ですから、スポーツマンや武道家や芸術家は、自らの存在そのものが、自己研鑽の道を歩むことな訳ですから、大変な修養と練磨がなければ秀でた存在などにはなれません。

中でも芸術家は、芸術そのものが宗教を母体として生れてきたわけですから、「選ばれた」人々としての自覚の元に、自己の研鑽に励み、自らの心を純粹にして神の声を聴く事が出来なければ、すぐれた作品や演奏などを残す事など出来ないのです。

その事は、優れたスポーツマンや武道を極めようとする人達が、求道的な生き方をする事と同じです。

求めなければ、素晴らしい心の「境地」になど辿り着けないのです。

この事は、俄かにそこに到達するわけなどありえないのですから、幼少の頃に始め、その道を歩み出せば、この時節を迎える頃には、60年も70年も修練を積み、大変な「高み」に到達する事ができるのです。

普通の人々は、ある特定の時期までは、子育てや家族の為や、生活の為に働かねばならないとすれば、その労働から開放されなければなりません。

しかし、生活の為の仕事を離れてから始めたのでは、遅すぎます。最低3年、できれば10年の準備期間があれば、その道に熟達し、自己練磨の道へと進んでいけますが、その時になって始めたのでは、心の「境地」が開かれる前に臨終を迎えてしまいます。

さて、最後に臨終を迎えることになるわけです。

その人の人生を完結する死に立ち向かうには、その人の心の「境地」が死に立ち向かえるほどに開かれてなければなりません。

死と向かい合うだけの勇気を持ち、或いは従容として死を迎える覚悟をするには、その人がその全人生の中で培った心の在りように因るのです。

全ての人が、その人生を完結させるべく最後になすべき事として、「死する」事ができなければ、その人は、自らの「死」に翻弄されてしまいます。

「死する」事を自らの事としてなしえるかどうかは、まさにその人の人生を象徴しているのです。